三月の幼兒童謠

葛原しげる

三月は、まづ早く、三日の桃のお節句があります。「雛まつり」です。その歌は、ずゐ分前に次のを、ものしました。この中に「お日」といふ言葉がありますが、これは、お恥しながら、私の鄕里の言葉で、實は、困つてをりますので「お日樣」と直しても歌へますから、さう願ひます。私のモットーである「ニコ〳〵ピン〳〵の歌」にも

「お日が照らうと照るまいと」

とあり、「夕日」にも

「烏よ、お日を追つかけて」

とあります。みな、「お日樣」と直したいと考へてをります。

さて「雛まつり」は、

――ひなまつり――

葛原しげる歌
梁田貞氏曲

一、今日はうれしい三月三日
桃や櫻のお花を生けて
きれいにかざつた雛だんの
前にならんで遊びませう

二、皆仲よく遊んでをれば
お日がおへやに明るくさして
お花ものこらずさきました
おだいりさまもうれしさう

（大正幼年唱歌第九集）

でありますが、第一節では、雛壇の前に並んで、お友達

と遊ばうといひ、第二節では、さうして遊んでゐると、お日様の光が明るくさしこんで、氣がついてみると、桃も櫻も、のこらず咲いて、いよ〳〵美しく、お内裏様も、嬉しさうだ、と悅んでをるのです。まことに、如何にも、のどかな、花やかな光景です。

三月の聲をきゝますと、「春」の心地がするのは、大人ばかりでせうか。事實は雪の下にも、春の芽は出かけてをり、二月の風の寒い中にも、柳の芽は、十分に、伸び出る支度をしてをるのです。「知らぬ間に柳の芽が出てをりました。いつのまに、吹いてゐたのか、春の風」といふ『春の風』もありますとほり、知らぬ間に、春の葉は、雪をおしのけて、頭を出さうとしてをります。その中に、菫があり、たんぽぽがあります。どちらも、人目につかぬ中に伸びかけてをります。そして、早く、野に出よ、野に來いよと、子供を招いてをります。

次の「すみれたんぽぽ」は、菫と蒲公英との色を、苦もなく覺えしめようといふ考から、第一句を、「すみれはむらさき、たんぽぽきいろ」としました。他には、何の巧みもなく、何の欲もありません。どちらも美事に咲いて、きれいな野邊で、皆さんで遊びませうといふだけです。

――すみれたんぽぽ――

葛原しげる歌
梁田貞氏曲

すみれは　むらさき
たんぽぽ　きいろ
どちらも　みごとに
のに　さきました
みなさん　そろつて
のあそび　しませう
すみれ　たんぽぽ
きれいな　のべで

（大正幼年唱歌第五集）

ところが、これだけでは、あまりに、單純であり、何となく物足りないといふので、のち十數年にして、次の「たんぽぽさいた」を新作しました。これには、目もさめるやうな色である黄の美しさを、十分にあらはさうとして、

ゐがほを並べて
といつたり、
お日様にこ〳〵、こがねの花に
といひましたし、更に、蜜蜂をも出して、
せはしく、花から花へ
ともいひました。申すまでもなく、幼兒といへども、

お日様にこ〳〵
　こがねの花に
といへば、花に、日がさしてゐるので、その花の黄は、ます〳〵鮮かであることも分りませうし、
　蜜蜂せはしく
　花から花へ
といへば、「花から花へ飛び廻つてゐる」忙しさである事は、十分分ると信じてをります。
また、
　たんぽぽ　さいた
　野みちに　さいた
を各節で反覆しましたのは、「たんぽぽ」こそは、野の花であつて、春の野に無くてはならぬ花である事を強調したうたです。

――たんぽぽさいた――

葛原しげる歌
梁田貞氏曲

一、たんぽぽさいた　野路にさいた
　ゐがほを　ならべて
　みんなよく　さいた
二、たんぽぽさいた　野路にさいた
　みつばち　せはしく
　花から　花へ
三、たんぽぽさいた　野路にさいた
　お日さま　ニコ〳〵
　こがねの　花に

（昭和幼年唱歌第四集）

三月は、鶏の雛の月でもあります。いえ、そろ〳〵孵化したのが、外に出て、よち〳〵ピョ〳〵と、盛んに活動をはじめるによい月です。小さな體、小さな脚、そして小さな嘴に、不似合な大きな聲を張上げて、仲間をか、親鳥をか呼ぶ眞劍な樣子も、涙ぐましいものがあります。
この幼兒唱歌としては、昔から次のがあります。

――ひ　よ　こ――

文部省唱歌

一、ひよひよひよこ　ちひさなひよこ
　兄弟なかよく　一しよにあるけ
　あしのつよく　ならぬうちに
　とほくへゆくな　ひとりでゆくな
二、ひよひよひよこ　かはいゝひよこ
　いつでもおやに　だかれてねむれ
　はねの長く　ならぬうちに

はなれてねるな　ひとりでねるな

ところが、所謂童謠が盛んになりましてから、次のが出來ました。まづ、

體は　草より低く
足は　草より若く
眼は　露より涼しく
心は　親よりやさしい

といふのですが、最後の「親よりやさしい」とは、少し、藥が利きすぎてをりませんかしら。しかし、最後に

寢床は　綿より　ぬくい

といつておいて、

親のおなかへ　はいる

といふのは、流石に、面白いではありませんか。つまりは、親のお腹の下か、翼の下へもぐりこむ愛らしさ、また、幸福をいふのですから、人間には、一寸、眞似の出來ない氣持よさですね。

――ひ　よ　こ――

島木赤彥氏歌
上田友龜氏曲

一、ひよこ〳〵
　お前の體は　草より低い
　草にかくれて　ピヨ〳〵歩く

二、ひよこ〳〵
　お前の足は　草より若い
　草の芽をふんで　ピヨ〳〵歩く

三、ひよこ〳〵
　お前の眼は　露より涼しい
　露をすつて　ピヨ〳〵歩く

四、ひよこ〳〵
　お前の心は　親よりやさしい
　親に呼ばれて　ピヨ〳〵歩く

五、ひよこ〳〵
　お前の寢床は　綿よりぬくい
　親のおなかへ　ピヨ〳〵はいる

（童謠唱歌名曲全集）

次のは、稍〻似てゐますが、

可愛い〻聲で――うたふ
可愛い〻足で――歩く
可愛い〻口で――たべる

といふのです。全く「ひよこ」は、右の三つの他には、仕事がないのです。

――ひよこ――

八波則吉氏歌
平岡均之氏曲

一、ピョ〳〵ピョ〳〵　可愛いゝひよこ
からをこわして　巣立つた子供
可愛いゝ聲で　ひよこはうたふ
ピョ〳〵〳〵〳〵　ピョ〳〵

二、ピョ〳〵ピョ〳〵　可愛いゝひよこ
日の暖かな　お庭をみんな
可愛いゝ足で　ひよこは歩く
ピョ〳〵〳〵〳〵　ピョ〳〵

三、ピョ〳〵ピョ〳〵　可愛いゝひよこ
親鳥えさを　拾つてやれば
可愛いゝ口で　ひよこはたべる
ピョ〳〵〳〵〳〵　ピョ〳〵

（童謡唱歌名曲全集）

しかし、右の二篇は、幼兒唱歌としては少しく、複雜にすぎませんかしら。私は、大正の中頃、忙がしげな中に、樂しみもあり、更に、あまり、ちよこ〳〵しすぎて、垣根の外へ出るこもなく出てしまつて、一羽、迷ひ子になつて、それこそ、聲を限りに、ピーヨ〳〵と叫んでるユーモラスなのも入れました。

――ひよこ――

葛原しげる歌
梁田貞氏曲

ひよこ　ひよこ　ピョピョないて
おやのまはりで
よろこびながら
えをひろふ
えをひろふ
ひよこ　ひよこ　ひよこが一羽
かきねのそこで
まひ子になつて
ピョ　ピョ
ピョ　ピョ

（大正幼年唱歌第五集）

（つゞく）